

フツゼノムスメ

かねこ きよつこ
金子 京子

(一)

「やっぱり一週間やったな」

「うん、そうやな。やっぱり一週間やったな」

トンボさんはそう言いながら、お伊せさんをニコリ笑って見返したあと、うんとゆっくりタバコを吸い込んでから、言葉を続けた。

「トミちゃんは今度は十日は続くとゆうたから、

抜けた声を出した。

トミちゃんはあとから遅れて、板場の裏の「板の間」と呼ばれている店の小さな従業員食堂にやって来た。

トンボさんはニヤニヤして、トミちゃんを見た。

「今な、お伊せさんに、やっぱりテルコさんもイカンかったとゆうてたとこや！ これで、『お好み』五枚やで。ええか、トミちゃん、今度はもう甘い考えはできんぞえ」

トミちゃんは、その大柄な体をゆさりと後ろに

またトミちゃんが負けや。わしとお伊せはんは、これでトミちゃんに五勝ゼロ敗や。お好み焼これで五枚おごってもらえるなあー」

トンボさんこと遠帆作治(とおぼさくじ)は「すし辰」の副板長で、お手伝いのお伊せさんや仲居のトミちゃんと、新しくすし辰の住み込みの仲居さんに入ったテルコさんがいつまで勤まるか？にお好み焼をかけていたのである。

テルコさんはよさそうに見えたのだが、「やー、やっぱりアカンかったなあ！」お伊せさんも間の

一度ずらしてから、大きくため息をついて、トンボさんではなくお伊せさんの方に目をやって、こうつぶやいた。

「あー、ええとこで、御家はんがまたぶち壊しや」「しゃーないで。この頃の若い人は御家はんのゆうことなんて、聞くわけもないけどなあー」トミちゃんによると、またタカのせいというわけである。

タカはこのすし辰旅館の御家はん、大女将である。「おおおかみは狼か」とからかわれるほど、町一番の怖い女将さんで通っているが、お伊せに

しろ、おトミにしろ、トンボにしろ、その割には長い勤めをこの店でしている。

世の中は大坂万博とやらで、店も大阪帰りに四国の高松や琴平に回るといって観光客でにぎわっていたが、昨年の旅館改築以来、新しい仲居さんを雇っては、すぐ辞められてしまうということを立て続けに起きていて、店は慢性の人手不足、宴会の時間には、孫の聡子や親戚の子どもたちまで、配膳場や下足番に駆り出されるほど、すし辰は手が足りなくて困っていたのである。

気づわしきは人一倍で、一日中、まるでこまねずみのように働いているのである。このおいせきんなら、厳しいタカの目にもかなうということが一目でわかるというものである。
反対にトミちゃんが、そんなタカのところでも二十年も勤まっているのは、のんびりして鷹揚であるからだろう。トミちゃんの下駄の音を聞けば、いつでもそれは、「カチャリンコチャリン」。決してせわしくなく歩くことはない。根っからのん気なのである。

板場の出口の方から、下駄の音がした。タカの足音である。おいせきさんにも、トンボさんにもトミちゃんにも、タカの下駄の音はすぐにわかる。いつ聞いても、「シヤカシヤカセンカイ！」と聞けるのである。

タカの息子の倉之助の足音は同じ下駄にしても「アカンアカン」、嫁の福代、つまり若女将の下駄は「コロココロン」。そんなことを考えているおいせきさん本人の下駄の音ときたら、「チャカチャカチャカ」とせわしなげである。

タカが動作の遅い、しかものんびりしたトミちゃんをそれでも店で使っているのは、トミちゃんがおそろしく正直者で、しかも体力が人並みはずれているからである。「まとめてみれば、やつぱりよう働いてる」というのが、タカの考えである。おつちよこちよいのおいせにしろ、のんびりしすぎのおトミにしろ、それはそれで、どっちもええとこはある。二人とも陰日なたなく、よう働いとるわ…というのが、タカの考えである。

トミちゃんが二十年、おいせきさんも十五年近くすし辰の住み込みだが、その二人より長いのが

十五じゅうごの時から住み込んで板場いたばの修業しゅぎょうを始めたこと
のトンボさんだ。板前いたまえの高下駄たかげたを履はいていること
が多い。高下駄たかげたの音おとは、「アッチモコッチモ」と聞
こえる。案外あんがい、よく動く気きのいい男おとこなのだ。
住み込みはとうとうこの三人さんにんになってしまった
が、トンボさんも来月らいげつには結婚けっこんして、すし辰たつの近所きんじよ
に家を借りる。

昔むかしは十人じゅうにんもいた住み込みすの仲居なかさんが、もう
二人ふたりになってしまった。トミちゃんだって、いつ通かよ
いになっても不思議ふしぎはない。

トミちゃん、そして「臨時りんじ」といわれる、おタ
ケちゃん、マサちゃん、静子しずこさんの三人さんにんだけでは、
改築かいちくして広ひろくなったすし辰たつの二十六部屋にじゅうろくへやをまかな
うことは無理むりだ。あと、一人か二人ふたりはどうしても
ほしい。福代ふくよは頭あたまをかかえているところなのだっ
た。
おいせさんは住み込みすの勤めつとといっても、もと
もと「内回りうちまわ」といって、すし辰たつの家族かぞくの用事ようじ、
とくに家事かじと子どもたちの世話せわをするお手伝いてつだいさ
んとして、住み込みすでいたのである。

タカは、今いま、三人さんにんいる通かよいの仲居なかさんを「臨時りんじ」
と呼んで嫌いやがられていることを、知しっているのだ
ろうか…。福代ふくよは、なんでも話はなせる芸者げいしやのとも蝶ちょう
姉なえさんによくこうこぼしたものだ。

三人さんにんの「臨時りんじ」さんは毎日まいにち、朝七時あさしちじから夜よるの九時くじ、
ときには十時じゅうじまでよく勤めつとてくれているのに。タ
カにとつて、ほんとの仲居なかさんは住み込みすの仲居なか
さんだけなのであろう。

福代ふくよは、おととい辞めやたそのテルコさんのあと
を埋めうめる人をさっそく探さがさなければならなかった。

根ねつからの楽らく天家てんかで、人一倍ひといちばいおしゃべりな割わりに
は、愚痴ぐちも文句もんくも言いわずになんでもこなすので、
忙しいいそがいときには「外回りそとまわ」の仲居なかさんの役やく、とり
わけお膳運ぜんはこびやお爛場かんばの手伝いてつだいをいくらでもやっ
ていたのである。

生まれは大阪おおさかだったが、戦争せんそう未亡人みぼうじんらしく、一人
で四国しこくの親戚しんせきを頼たよって琴平ことひらに来て、すし辰たつに住み
込みすで就職しゅうしょくしたのだ。やって来たきのは、タカの孫まご、
聡子さとこが満一歳まんいっさいになったばかりの昭和三十年しやうわさんじゅうねん、四月
のある朝あさであった。すし辰たつの軒先のきばきにまで、桜さくらの

花吹雪が舞い飛んでくるほどの風の強い日のことだった。

「ほな二、三日おつてみてもらおか」

これがタカの人を雇う時の口癖であった。

そして、ほとんどの人が一日で逃げ出すのが常であった。

ところが、お伊せさんは、タカのこのせりふを聞くか聞かぬ間に、質素な木綿の着物の上に白い割烹着をさつと着込んで、「ほな、なにからしまひよ？」と目の前のタカに聞いて、にこつと笑ったのである。

タカは内心、「これは当たり前クジやな！」と思つたのであろう。

その晩の「板の間」、従業員の食事場のおかずは、おかずが一品多かつた。鯛のあら煮がついたのである。それは、何か祝いのあつた日のおかずで、板長の重五郎が、タカのさしずなくては、決して「板の間」にまわすことのない賄い料理であつた。

(二)

「まあ、若奥さん、すんませんなあ。氣いばつか

に千代さんの世話をしているようだった。

福代は、この千代さんが復帰は無理だとしても、

誰か心あたりはないだろうかとの心積りがあつて、退院間もない千代のところにやって来たのである。もちろん、タカには内緒である。

千代さんは、大工をしている息子の作った寝台に寝て、背もたれをして、ヨイシヨと福代の方を向き、

「へえ、こんな格好ですんません。へえ、人なあ、人、そうやなあ…。ちようど、加代子の友だちが誰

り遣わせて、すんません。横になったままで、ほんますんません。どうぞ、どうぞ、はよ、こつちあがつてください。もうすぐ加代子も帰つて来るはずですきに」

去年まで仲居頭だった千代さんが、町外れの片岡外科から退院したというので、福代はとりあえず、好物のへんこつまんじゅうを持って、千代さんのうちをたずねていた。

千代さんは右足を骨折して、それが長患いとなつてすし辰を辞めてしまったのである。退院はしたもののまだ養生が必要で、末娘の加代子が主

やら、丸亀の料理屋さんを辞めて、どっか琴平で働きたいとはゆうてたようですけどなあ…」

千代さんははっとして顔色を変え、福代をまじまじと見て、

「そうか、加代子ちゃんのお友だちか、その人はほんだら十九か二十とかいいな？」

「いやいや、若奥さん、うちの子はいけませんわ。とても勤まりませんで。あの子、よきそうに見え

加代子は十九歳で、半日だけ、新聞販売店で配達と経理の仕事をしていた。千代に似て、よく気

て、聞かん子でっせ。御家はんが見たら、あんた、ほれ、アホ！って、それで終わりですわ、へえ」

のつく働き者だった。

これは滅相もない！といいながら、ていよく断

「へえ、多分そうやと思います」

られているのだなあと福代にはすぐにわかった。

「千代さん、加代子ちゃんは無理やろなあ？」

かわいい我が子を何もあんなに苦勞の多い店に

「へっ、うちの加代子ですか？」

行かせることはない…と親なら誰でもそう思うだろう。

(以上11月26日放送分)